

日本庭園学会ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

NO. 75
平成 25 年

予告 平成 25 年度 関西大会・研究発表会

発行 日本庭園学会(会長 鈴木誠)
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学 地域環境学部 造園科学科
ガーデンデザイン研究室内
TEL(03)-5477-2430(鈴木誠研究室)
<http://www.soc.nii.ac.jp/asjg/>

予告 平成 25 年度 関西大会・研究発表会

平成 25 年 11 月 9・10 日 京都府京都市

平成 25 年度の関西大会の開催スケジュール及びシンポジウムのテーマが決定した。

開催日時は、平成 25 年 11 月 9 日(土)、10 日(日)の 2 日間。1 日目は、午前中にシンポジウム、午後から研究発表会が予定されている。シンポジウムのテーマは、「京都市内の町家・民家の庭の調査」である。2 日目は、京都府京都市左京区に所在する近代につくられた邸宅の庭において現地検討会が行われる。

平成 22 年度の関西大会のシンポジウム「考庭学の可能性」において、従来の庭園学や造園学では、その研究対象が作り庭に偏重してきたという経緯が指摘され、古代の庭と作り庭との関係性について検討が行われたのは、記憶に新しい。

そもそも生活の場において作り庭がその他の庭と共存しているという実態は、過去の話ではなく、現代の住環境においても同じことがいえる。近年では、庭の文化財指定が町家をふくむ民家に広がっており、住まい内に点在する庭の種類や機能を把握する必要性が高まっている。

京都市では、平成 22～24 年度にかけて市内全域を対象に、これまで関西研究会考庭学部会で検討されてきた事項を念頭に置いて、町家・民家の庭の概要調査が実施された。今回のシンポジウムは、その成果を紹介するとともに、現行の住環境にたいする考庭学の適用ならびにその意義について検討するものである。

会場は、1 日目が龍谷大学大宮キャンパス(京都市下京区)、2 日目は石村邸、旧三井別邸の庭が予定されている。詳細については、本紙次号(No.76)で案内する。 ■

日本庭園学会関西大会 スケジュール

日 時

平成 25 年 11 月 9 日(土)、10 日(日)

場 所

公開シンポジウム・研究発表会：

龍谷大学大宮キャンパス

現地検討会：京都市左京区下鴨神社周辺



シンポジウムの風景(前回全国大会より)

【1日目】

公開シンポジウム「京都市内の町家・民家の庭の調査」

8:45 受付開始

9:00 開会・開会挨拶

9:10 主旨説明

9:20-11:30 話題提供

「町家・民家の庭の現地調査手法」

木下 絃子・村上 真美(京都府教育庁文化財保護課)

「生活と住まいの相互関係」

今江 秀史(京都市文化財保護課)

「町家・民家の庭の形態と配置」

仲 隆裕(京都造形芸術大学)

11:30-12:15 パネルディスカッション

昼食(理事会)

12:15-13:30

研究発表会

13:30-17:00

情報交換会

18:30-20:30

会場：京都市よみぎ花京か(ちゃんこ鍋)

住所／京都市東山区清水四丁目 200

TEL / 075-561-9900

会費：4,000 円

※参加をご希望の方は、かならず期限内(11月1日まで)にお申し込みさい。コースメニューである都合上、当日の参加は受け付けられません。

【2日目】

現地検討会

9:00 受付開始(集合：下鴨神社(賀茂御祖神社))

9:30 開始「三井別邸」

11:00-14:00「石村邸」(2班体制で交互に昼食)

※30名限定。参加は申し込み順ですが、会員が優先されます。

15:00 閉会挨拶

15:15 終了

■会費(2日間)

学会員(一般)：2,000 円

非会員：4,000 円

※ともに資料代 1,500 円を含みます。

※学生は、会員の場合 1,500 円、非会員の場合は 3,000 円とします(ともに資料代を含みます)。

※大会参加費については、1日のみの参加でも上記金額を徴収します。

情報交換会(11/9)：4,000 円

※私費による参加を原則といたします。

■申し込み期限

11月1日(金)

■問い合わせ・参加申し込み

仲 隆裕(日本庭園学会関西支部)

FAX：(075)791-9342

今江秀史(日本庭園学会関西支部)

メール：hideimae50@kyoto.zaq.jp

※お問い合わせは、極力、FAXにてお願いいたします。



見学会の風景(前回全国大会より)

■研究発表の募集

平成 25 年度の研究発表会で発表を希望する方は、下記の要領にしたがうこと。

発表時間は、ひとりあたり 30 分とし、発表 25 分、質疑応答 5 分を予定している（変更する場合もある）。また、発表には PC プロジェクターの使用が可能である。

◆発表申込み、発表要旨提出期限

平成 25 年 9 月 30 日（月）

◆申込み方法

発表者氏名・所属・題名・連絡先を明記し、発表概要（200 字程度）を添付のうえ下記の「発表申込先」まで送付すること。原則的には E メールとするが、郵送もしくは FAX でもかまわない。

◆本文版下原稿の郵送期限

平成 23 年 10 月 18 日（金）

◆執筆要領

全発表者分を研究発表要旨集として印刷し、当日参加者に配布する。原稿はそのまま要旨集の版下とする。そのため、ワープロを使用して作成すること。分量は、A 4 判で 2 ページもしくは 4 ページ、6 ページとする（奇数ページでの原稿は、受け付けないので注意すること）。

1 ページあたりの文字数及びページレイアウトは、学会誌の論文の書式に準じ、横書き 2 段組、1 段あたり 25 字 40 行となっている。なお、書式はホームページからダウンロードが可能となっている。

申し込みと資料提出の締め切り日は厳守のこと。

◆発表の申込み先・本文版下原稿の提出先

〒 606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116
京都造形芸術大学日本庭園研究センター 気付
日本庭園学会関西支部事務局 FAX：(075) 791-9342

◆発表要旨の提出先

関西支部・広報担当 今江 秀史
メール：hideimae50@kyoto.zaq.jp

河原武敏先生を偲んで

日本庭園学会会長 鈴木誠

平成 25 年（2013）
4 月 25 日 朝、元
日本庭園学会会長
（第 5 代、2000 年～
2003 年）河原武敏
先生がお亡くなりにな
られた。

前日の 24 日 朝、
電話の向こうで、お
元気そうな感じにて
「足が少し痛むので、
27 日の理事会は欠
席するよ…。それと、

大会発表の申込みも今度は名古屋だから足が少し痛いので、今回はやめとく…。」という会話をされていたので、突然の訃報であった。

先生は、昭和 6 年（1931）3 月 24 日生まれであったので、ちょうど 82 歳とひと月を経た日だった。いつも、庭園のこと、造園のことを楽しそうにエネルギーに語られ、現場へ、現地へと足を運ばれていたことが懐かしい。また、本学会の設立当初からの理事会メンバーであり、全国大会には毎回欠かさずに出席し、研究発表されていたことも忘れられない。ここに、河原武敏先生のご業績などを記しつつ、謹んでご冥福をお祈りすることとしたい。

河原先生は、東京農業大学農学部緑地学科（現・地域環境科学部造園科学科）を昭和 28 年（1953）3 月にご卒業（特待生・総代）の後、東京都建設局にて造園技術者としての活躍を開始された。また、同年（社）日本造園学会に入会され学会活動も開始されている。都庁在職は 23 年にわたるが、この間都営公園・霊園などに関わる造園計画・設計、施工監理を数多くこなし、当時都庁造園職の間では「施設の河原」との異名を得ていたという。また、東京都在職中に設計、工事担当した文化財庭園の各種施設も数多く、後の大学時代以降の研究・教育の礎となったという。

昭和 51 年（1976）、当時東京農業大学農学部造園学科



河原武敏先生

長であった江山正美教授から請われて、東京農大助教授として赴任し、江山教授の後任として造園計画学第1研究室主任（後の庭園学・造園学原論研究室、現ガーデンデザイン研究室）をつとめた。授業担当として実務経験を活かした「庭園学及び演習」などの設計演習のほか、「庭園史」、「近代造園史」等を担当し、この分野の研究・教育に後の四半世紀を捧げることとなった。

日本庭園に関する専門的研究としては、平安・鎌倉期の庭園に関して絵巻物や文学に表現された内容を長年にわたり調査考察してまとめた「平安鎌倉時代の庭園植栽に関する研究」により東京農業大学より、博士（農学）を授与（論博1996）されている。

一方、中国庭園に関する造園学分野の研究者としても後年第一人者として知られ、中国庭園の現地調査回数は十数回に及び、中国上海同济大学や北京林業大学でも招待講演されている。先生の中国庭園研究は毎年の日本庭園学会での研究発表で知られるところだが、日本造園学会や造園関連雑誌等にも数多く論文・記事を公表されている。

■河原武敏先生の主な経歴

1931年（昭和6）3月24日

東京生まれ

1953年（昭和28）3月

東京農業大学農学部緑地学科 卒業

1953年（昭和28）6月

東京都建設局に採用

1976年（昭和51）3月

東京都を依願退職（勤務年限23年）

都庁在職中の主な仕事

①都立公園、霊園、文化財庭園の計画・設計・監督等工事件数474

②「公園設計の手引き」「公園施設構造基準」など造園建設技術関係の手引き・構造図集・基準などの作成件数13、ほか。

1976年（昭和51）4月

東京農業大学農学部造園学科 助教授

造園計画学第1研究室主任、庭園学・造園学原論研究室主任、庭園史・近代造園史・庭園学及び演習等の授業科目を担当

1995年（平成7）4月

東京農業大学短期大学部環境緑地学科 助教授

1996年（平成8）4月

同学科 教授

緑地計画学研究室主任、緑地計画学・公園論・庭園論・緑地計画学演習等の授業を担当

2000年（平成12）5月

日本庭園学会長（第5代、～2003年5月）

2001年（平成13）3月

東京農業大学定年退職（勤務年限25年）

2006年（平成18）5月

（社）日本公園緑地協会北村賞受賞

2008年（平成20）5月

（社）日本造園学会上原敬二賞受賞

2013年（平成25）4月25日

肝不全のため逝去（享年82歳）

戒名：武峰院雅庭賢敏居士

■代表的著書

『小庭園のつくり方』（1972）、『造園工事技術者試験標準テキスト』（1979）、『名園の見どころ』（1983）、『中国庭園の技法』（1985）、『平安鎌倉時代の庭園植栽』（1999）、『日本庭園の伝統施設』（2001）ほか

報告 平成 25 年度全国大会

「名古屋市での大会は将来的な全国開催のはじまり？」

一年にそれぞれ二回、関東は主に東京、関西は京都を舞台として交互に研究大会を行う。その繰り返しがながく当学会の常態であったし、それについて疑問を感じる会員はあまりいなかったと思われる。

日本学術会議のホームページの同会議協力団体を調べてみると、本邦には、当学会をふくめおびただしい数の学術団体が設立されている。筆者が把握しているわずかな事例をみるだけでも、各団体の研究大会は、会員が所属する大学などを会場に全国展開している。

それをふまれば、今回、当学会の全国大会が愛知県名古屋市で開催されたことは、世間的にはことに足りないことであるが、今後の学会運営のあり方を考える上では大きな転換期となった。

これまで、研究大会が東京と京都を中心として開催されてきたのはなぜだろう。それは、場所の利、偶然または惰性など、さまざまな要因が考えられる。その一方で、庭の歴史に照らし合わせてみると、研究大会の会場が東京と京都を軸とされてきたのは、むしろ必然的であったといえるかもしれない。

埋蔵文化財の発掘調査結果の蓄積により、庭の歴史は縄文時代にまでもさかのぼることができるようになったが、成立以来存続している庭を指標とすれば、現代に直結する庭の歴史の起点は平安期が起点であり、その中心は長らく平安京・京都であった。江戸期に政治の中心が江戸に移って以降、庭の文化の中心は江戸・東京に移行し今日にいたっている。

いくぶん大きな言い回しになるが、従来の東京と京都に限定された研究大会の開催は、庭を取りまく文化の主たる二極の地域構造を反映していたと考えることはできないだろうか。

庭を取りまく文化が、江戸・東京と平安京・京都という都市を中核に発展してきたことは、まぎれもない事実である。しかし二つの都市だけで庭の歴史を語ることはもちろんできない。実際、これ個々の庭や遺跡庭園にかんする研究や報告は、日本全国の地域が対象となってきたし、今や飛鳥期・奈良期の遺跡のことに触れずして庭の歴史を語ることは難しくなっている。実態としては、庭の歴史における江戸・東京と平安京・京都の際だった優位性はむしろ薄れている

とみることもできる。

とはいえ、かぎられた地域に集中かつ継続して庭がつくられた地域としては、江戸・東京と平安京・京都が特別であるのに疑いの余地はない。平泉や鎌倉、一乗谷など同一地域にたくさんの庭がつくられた地域はあるにはあるが、密度と期間という点についていえば比較の対象にはなるまい。

庭の研究に携わる者にとって、江戸・東京と平安京・京都は、いわば聖地のような地域であり、われわれは深層心理のなかでこの二つの地域から軸足が大きく外れることに抵抗を感じてきたのかもしれない。それは、庭園学が土地と密接に結びついた学問であることの特質を考えてみれば、まんざら絵空事ともいえないだろう。

思い返してみれば、先の名古屋市での全国大会の実施に、伏線がなかったわけではない。平成 22 年の全国大会は千葉大学松戸キャンパスでの開催であった。松戸市は、東京都葛飾区の西隣、東京近郊にあるので、ほとんど従来の延長でしかなかった。それでも内向的であった近來の大会開催地の選定に、新機軸を見出したに違いなかった。広い松戸キャンパス内に点在する庭とそのすぐ近くにある戸定邸との立地に、庭を取りまく文化の新鮮な一面を垣間見た方も少なくなかったのではないか。

当たり前なことではあるが、本などで読むのと実際に行くのとでは、庭の体験はまったく異なる。庭が所在するその風土や気候、食文化、現地住人の気質や使う言葉など、あらゆる現象を通じてわれわれは庭を体験している。庭と地域・土地との分かちがたい結びつき、時にはうっとりうくなるほどの親近性、真摯に庭の研究に取り組む者にとっては、そうしたことが分かりすぎるほど分かるがため、いったん定まった拠点から離れることが容易ではない。仮にそれが自身の地元ではなかったとしても。

こうした庭園学の土地への帰属性を念頭におきつつ、新たにその土着性に目を向けることを大会の開催地の全国展開というかたちで示された鈴木誠会長の提言は、きわめて明解であった。とはいうものの、最初にその矛先が向けられた東海地区の会員が戸惑われたのは想像に難くない。なにしろ、これまで大会の立ち上げから進行の手法は、一部の理事のなかだけで伝え知られていることでしかなかった。全国大会実行委員のみなさまの尽力のおかげで充実した大会となったことに御礼申し上げたい。揚輝荘庭園と爲三郎記念館庭園の見学をとおして得た実感をもとに、名古屋における茶の湯文化への関心の高さが庭や建物に与えている影



見学会の風景（前回全国大会より）

響について学べたことは、じつに貴重な体験となった。

非公式ではあるが、平成26年の全国大会の開催地は新潟市であるという計画も出ている。こうなれば、いっそ高校総体のように日本全国で大会を開催し、全国制覇をしてみたくなくなる。思いっただけでも栃木県、長野県、福岡県、兵庫県、奈良県、福岡県、宮崎県であれば、有力な会員の手によってすぐにでも大会開催ができるようにも思える。

勝手なことばかり述べてきて恐縮だが、最後に、デジタル技術の交流が見られる今日であればこそ、各地域を巡り歩いて議論を交わすことが、学会の特色ある普及啓発活動となるのではなるにちがいない。関西大会はどうなるのか？全国に支部の必要はないか？そんなことを議論していくことが、学会の発展につながっていくはずである。

今江秀史（京都市文化財保護課）

編集後記

先般行われた全国大会で、河原武敏先生にお会いできないことを知ったとき、それは痛恨のきわみであった。私見ではあるが、河原先生は現今最高の庭園学者でいらっしゃると思う。十数年前はじめて当会の関西大会に参加したい、そんな偉大な先生が懇親会で温かいお言葉をかけていただいたことを、今も忘れることができない。

近年、全国・関西を問わず懇親会への参加者が増加している。それも若い学生、庭園学や造園学に携わらない方々が多くなっており、著名な先生や一線でご活躍の庭師、設計者、役人がいるなかでも、とても参加していて楽しいという感想を耳にする。そうした朗らかな会の雰囲気を中心にいつもいらしたのが、先生であった。そして研究発表会を常に牽引して下さっていたのが先生であり、その庭に対する愛情と情熱にわれわれはいつも励まされてきた。

これからは、研究発表で先生の奥深い教えを乞うことも、鋭くも柔和なご指摘を受けることができなくなり何とも寂しい。こうして関西大会の準備をしていると、ふと河原先生のことを思い出して、これからも変わらず当会の良さを継続していくためには、一層の努力が必要であると感じている。

【会費納入のお願い】

学会費の納入額をご確認のうえ、納入のほどよろしくお願ひします。また、過年度滞納の方は併せて納入のほどよろしくお願ひします。

協力者：鈴木誠（日本庭園学会会長）、北森さやか（植彌加藤造園株式会社）

日本庭園学会広報委員会

今江秀史、加藤友規

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116

京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342